

その二 広島文教女子大学短期大学部

国文学科

国文学科は、昭和四十年四月、英文学科とともに開設された。文学部の国文学開設よりも一年前である。

十八年が経って、学科としての態勢はすでに確固としたものになってはいるが、短期大学の国文学科というものは、もともと重い課題を抱えている。学問を骨格とした人間教育の場であることはいうまでもないが、国文学という学科の性格からして、それがそのまま卒業後の職業に直結するわけではないので、近年のように目まぐるしく移つり変わる学生気質が端的に表われてくるのも、この学科である。

全国の私立短期大学の国文学科の関係者が集まって、国文学科はいかにあるべきかというようなテーマの研究を続けている。本学もこれに参加し、研究を重ねているが、さらに引続いて、カリキュラムの検討をはじめとして、授業のありかた、研究指導のありかたなどの具体的なことがらについて、一つ一つ洗い直してゆく態勢に入っている。

学生の動向

文学部と同様に、中四国出身者が多く、九州出身者がこれに次ぐ。各地に短期大学が整備されてきた今日、特に女子の場合は地元志向が強いかかわらず、遠隔地からの入学者が多いことは、本学科に対する評価のほどを如実に示しているわけで、まことに喜ばしいことである。と同時に、責務はいよいよ重大

であると思う。

本学科に入学して勉強するうちに、さらに志を高めて、卒業と同時に文学部の三年次に進む者も毎年何人か出てくる。単位取得の関係で、文学部に進んでからは一段と厳しい勉強が必要であるが、幸いにして全て志の堅い人たちばかりで、十分な成果を挙げて卒業している。中には、短期大学部卒業後何年か経って、文学部に編入する人もある。同一の学園内のことでもあり、意欲の強い人にはこのような進みかたも可能で、今後でもできるだけ多く受け入れるようにしてゆきたい。

指導の状況

学生数をあまり多くしないで指導を徹底するという姿勢は、当初から堅持している。近年は一学年をA・B二クラスにする形を採っているが、一クラス三十人程度である。短期大学の学生は、入学した年と卒業する年と、僅か二年の在学であるから、ややもすれば教員との接触が少なくなりがちで、それを防ぐためにも、小人数のクラス編成というのが絶対の必要条件ということになる。

学習・研究の実際であるが、本学科の特色として挙げられる第一は、教員の配置である。教員は文学部・短期大学のどちらかに所属してはいるが、講義・指導という実際面ではこの区別はなく、全ての教員がこれに当たってきた。僅かの教員で、あれもこれもという短期大学部にありがちな弊から内実を守るため、これは今後も堅持してゆきたい。

卒業論文に類するものを必須としない短期大学もあるが、本学では卒業レポートとして全員に課し、二単位を与えることにしている。これも当初は選択単位であったが、近年必修とした。学生にとっては難事業であるが、勉強の成果をしめくくるものとして、極めて有意義であるから、今後も続けてゆきたい。対象によっては、グループによる共同研究もあり得るわけで、そのあり方についてはまだまだ研究の余地はある。

研究会活動は、文学部と同じように参加できるが、参加者はさほど多くないのが現状である。短期大学部生だけで行われる研究会もなくはないが、まだ不十分である。指導・助言者の増員とか、時間やゼミナール室の確保を図って、より適切な研究会活動を活発にしてゆく必要がある。

国文学科が毎年実施している研修旅行は、各地の文学遺跡探訪である。一つは二年次生の参加する万葉旅行で、飛鳥を中心として、その近辺を訪ねる。当初は一週間ぐらいの旅であったが、近年は三泊程度としている。費用のこともあって、参加者は必ずしも多くはないが、実地研究の貴重な場であるから、いろいろ工夫をして継続してゆくつもりである。

一年次生には、県内の文学遺跡探訪がある。地元であっても、案外に不案内なもので、まず身近なところからという活動の一つである。

(図書整備の件、国文学会の件は、文学部の展望のところで述べたので、ここでは特に触れない。)

十八年が経ったが、問題はいつも新しい。人間教育と学問と、この二つを柱にしなが、なおかつ流動する社会に出て、しっかりと働けるだけの実際のな力を、二年間で養成し続けるために、われわれは不断の努力を傾けてゆきたいと思う。

(文責・湯之上早苗)

英 文 学 科

本学短期大学の英文学科は、昭和四十四年四月に可部女子短期大学の英文科として誕生した。

田辺 昌美・

学科の設立には、当時広島大学文学部の助教授であった田辺昌美氏および同じく広島大学教養部

出水春三教授

の教授であられた出水春三先生のお二人のお骨折りに負うところが大きい。残念にも、お二人と

も故人となられたので、この小稿の冒頭に、まずはお二人のことを略記して感謝の微意を捧げるとともに、ご冥福をお祈りしたいと思う。

田辺君は筆者と広島高師で机を並べていた仲でもあるために、ことさら学科の開設には肩を入れていただき、開設後は約十年ほど講師として出講の労も取っていただいた。本学科創設の最大の恩人である。昭和十九年の秋に、広島文理科大学の英語英文学専攻を出て、広島高師附高の教諭から広島高師教授、広島文理大講師、広島大学文学部講師を経て、昭和四十五年文学部教授となり、最後は広島大学の学生部長としての激務の中で倒れられた。その学問的業績については私が云々するのもおこがましいことで、すぐれた学者であると共に、終始一貫して偉大な教育者として学生に深い感化を与えられたことは周知のとおりである。同時に、広島大学の生協の理事長や広島大学の教職員組合の委員長を兼務したこともある一事が示すように、偉大な実践人でもあって、われわれ同期生が最も誇りに思う友人の一人である。

出水教授は、東京大学のご出身で、その後旧制の松江高校、松山高校を経て、愛媛大学教授から昭和二十九年に広

島大学教養部の教授に転ぜられた。シェークスピアの諸作品にご造詣が深く、本短期大学英文科の創設に力を貸していただいたあとも、昭和四十、四十一年および四十三年と、三年間講師として出講してくださり、学園の発展に尽力を賜わった。昭和四十五年、悪性腫瘍のため突如長逝されたのは、残念の至りである。

このようなお二人のお力添えを支えとして、われわれが英文科開設の事に取りかかったのは、昭和三十九年の五月頃のことであった。

図書整理

筆者個人としての当座の仕事は、図書の購入およびこれを書架に陳列するための整理であった。なにしろ初めての経験であるから、勝手知った図書に関する仕事ではあっても、若干の不安と緊張の半年が続いた。実際の作業は、もちろん図書館で行ったわけであるが、当時、それはまだ短大と附属高校の共用であった。そして附高の教諭として図書主任を兼ねていた方が、外国語について詳しくなかったため、その先生の援助を期待すべくもなく、講義その他の教務の合間を見ては、筆者一人で分類の作業をした。購入図書は、同時に開設を計画した国文科と英文科の両科であわせて三千冊の基準があったので、いろいろな条件を考慮に入れて、国文科に千八百冊、英文科に千二百冊と分けて仕事に取りかかった。図書館学については全くの門外漢が、図書館にあった一冊の分類用手引書だけをたよりに、しかも中途までは時間に追われて行った分類であるから、随分と不完全な図書整理作業になったのではないかと思われる。カードの記入や整理には、食物栄養学科の榎原靖子副手に手伝ってもらって、大いに助かった。中途まで時間に追われたというのは、短大新設でなく学科増だけであったために、現地審査が省かれることが中途で明確になったからである。そういうわけで、整理の最後の方は十分余裕を持って仕上げる事ができたのは幸いであった。

学生募集

こうして、この年の十二月上旬だったかに、開設許可の内示が文部省から届いた時には、正直いってホッとした。これでいよいよ専門の学科で教えることができると思うと、本当にうれしかった。

学科開設の見通しが立つと、息つく間もなく、学生募集のための極めて現実的なもろの活動にとりかかった。つまり、国文、英文両科開設の広報のために、多忙な日々がしばらく続いた。正式の募集を二回、更に臨時の募集を一回と、計三回の入試を行った。筆者の場合、英語の問題を一人で三回分もつくるのは、かなり苦しい作業であったが、四十年四月、いよいよ英文科の開講の日を迎え、三十四名の学生を数えることができた時には、この苦勞もどこかへ吹っ飛んだ。定員を少し割ったが、入学者の学力は決して低いものではなく、ほぼそろった力量の学生を集めることができたことは、PRが十分には行届かない第一回としては、まずまずの首尾ではないかと自らを慰めた。

教授陣容

教授陣容の方は、横山教務部長が専らその衝に当たったのであるが、前述した田辺、出水両先生の絶大な支援のおかげで、大した困難は経験しないではば順調に事が運んだように記憶している。

英文科出発の時（昭和四十年四月）の教授陣容は、次の如くであった。

職名	氏名	担当学科
教授	吉村利慎	文学概論・英文学作品研究
教授	河野喜好	英文法・英作文法
助教授	小田忠	英文学講読
講師	小川登	英作文法
講師	直野裕子	英文学講読

記録によると、他に十人の方々に兼任講師として教授陣に加わっていたが、その中に、後に本学の教授となっていた関本至、竹内正三両先生のお名前を拜見して、お二人の先生との深い縁を思うのである。吉村教

入試状況

開設翌年の第二期生（昭和四十一年四月）として四十二名が入学し、まずは順調なすべり出しであった。しかし、戦後の所謂第一次ベビーブームの時に出生した女子が大学に進学し終った昭和四十三年度を境に、これは人口統計の数字から多少予想していたことではあったが、入学者数が減り始め、以後経営的にいえばやや苦しい時期がしばらく続いた。

この事態の解決策の一つとして、昭和四十四年四月に、図書館職員である司書・司書教諭養成の課程を開設することとなり、英文科・国文科在籍の学生がこれを受講できるようにした。カリキュラム（計三十一単位）の内容は省略するが、前記両学科の学生のほぼ四割（この割合は教務課のスタッフの印象による）の者が、例年これを受講してきた。また、それまで十分行き届いた配慮を払っているつもりであった就職指導についても、大学全体としても英文学科としても、さらに一層力を入れるように心くばりをした。（たとえば、昭和五十二年四月から、それまで学生部に所属していた就職委員会を、就職指導部として組織上独立させることにした、など）。

一方で、そのような苦しい入学者減の時期であっても、入学試験実施後の可否の判定に際しては、試験成績（総点三百点）が受験者の総平均点の七割に足りない者は合格としないという原則を頑固に守った。この場合の受験者の総平均点というのは、短期大学の全受験者のことであり、したがってこの原則は英文学科だけに適用したのではないが、経営的には何とんでも苦しい我慢であって、この方針を学長先生が終始堅持されたことに対して、深甚な感謝の念を禁じ得ない。

このような苦心の甲斐あってか、四、五年前から英文学科の志願者は、再び増勢に転じた。参考までに過去三年間の入試状況の数字を次に記してみよう。

入試年度	募集別	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
56	一次	116	109	72	31
	二次	30	29	20	
57	一次	146	133	88	38
	二次	37	32	21	
58	一次のみ	177	160	146	51

(注) 1 附高出身者に対し行う特別入試に関する数字は、一次募集の数字の中に算入した。
2 合格者数は第二志望での合格者数を含まない。

就職状況

ちようど高度成長期のさなかに誕生したおかげで、終始好調を保ち続けてきた。例のオイルショック以後も、それ以前に比べて就職率が特に落ち込んだという記憶はない。学生課編集の就職の手びきでは、毎年学生が卒業して約一ヵ月後の五月一日現在で就職率がまとめられているが、手許にある手びきによると、五十六年三月の卒業生も五十七年三月の卒業生も、ともに百パーセント就職となっている。今年、つまり五十八年三月の卒業生に至っては、卒業前の三月十六日現在で、すでに就職決定率は九十六パーセントという好成績であった。これはわが短期大学の六つの学科・コースの中で最高の成績であるが、おそらく全国の短期大学の数ある学科・コースの中でも、トップ・グループに入る成績ではなからうか。

ESS活動

これは学生の自主的な課外活動である。他の諸大学と同様、本学でも英文専攻の学生を中心として行われ、開設当初の年度から終始盛んに行われてきた。その活動の目玉ともいえる英語劇も、初年度の H. L. Miller 原作の“Say It With Flowers”の上演以来、ほとんど毎年、夏の合同発表会や秋の大学祭行事

の一環として、学内の講堂で、あるいは広島市中心部の各種施設で、盛大に開催されてきた（ただし、学内講堂で上演した初年度の英語劇だけは、ESS活動というよりも、大学祭の中での英文科一期生のクラスの行事として行われたような記憶が残っている）。もちろん、学生の自治活動だといっても教員が全然無関心というわけでは決してなく、劇の上演その他について助言を惜しまず与えてきたし、時には学生の合宿練習に同行して学外の宿泊施設に泊り込んで指導したりしてきた。

将来展望

開設以来、引き続いての卒業生の上々の就職状況や、先に述べた近年における志願者数の増加の勢いなどから見ても、英文学科の将来の展望はと問われれば、それは極めて明るいと自信を持って答えることができる。当面の英文学科の教育目標の実現を旨として、今一層のわれわれの努力が望まれるのは当然だが、この点についての努力を怠らさず続けてゆけば、学科の未来は極めて明るいと確信できる。

（文責・小川 登）

幼児教育学科

胎動から

幼児教育学科が産声をあげるまでの過程およびその経緯については、広島文教通信第四号（昭和四

誕生まで

十五年三月刊）に概要が紹介されている。それによると、本学科の胎芽は、昭和三十七年の可部女子

短期大学の発足時、その申請の段階で、将来計画の一部として「保育関係の学科の併設も考慮している」旨を明記しており、すでに本学の出発の時点で生命活動を開始していたのである。ところが、学園は、当初の目標に沿って短期大学を整備していく過程で、時代の要請や社会的背景を考慮し、また学園の教育理念に鑑み、将来構想を再検討した

見通しの中で、昭和四十一年に文学部（四年制）の新設というステップを踏むことになった。この時点から、名称も現在の『広島文教女子大学』と変更し、文学系と教育系の学科の完備を目指して歩むことを始めたのである。この文学部（国文学科・英文学科）の完成年度を待って、所期の目的に従って、短期大学部に保育関係の学科の新設のための準備を再開することになった。

昭和四十四年初頭頃から、学舎や設備などキャンパスの全体的な整備とともに、教授陣容などスタッフの確保・充実に努めて、同年九月に「広島文教女子大学短期大学部幼児教育学科」として文部省へ新設を申請した。同時に、厚生省に対しても、これを保母養成施設として申請した。当時、すでに大学の施設・増設に対する行政の姿勢は厳しいものとなっていたが、本学の熱意と万全の計画は、むしろ審査委員の賞讃を得たほどで、他の大学や短大に比べて異例とも思える程の円滑な手続きとなったのは、今日までの語り草になっているくらいである。

教育環境

の整備

本学科は、昭和四十五年四月一日、初代学科長空本和助教授以下十名の陣容で正式に発足し、同月十日の理念として流れる少教精鋭の方針はそのまま踏襲し、優れた教授陣で優れた幼稚園教諭、および保育所その他の収容施設の保母の養成を目指して、第一歩を踏み出したのである。本来の幼児教育の目標と将来を見通した新しい時代のニーズに応えるべく、学生の教育課程とそのため施設・設備など、教育や研究の環境については特に熟慮し、慎重な検討の上に、理想的な大学創りという念願に向かって、歩み始めることになった。

教育課程については、卒業後、教育保育の現場において、真の意味で活躍できる優秀な人材の養成を念頭に置いたカリキュラムを構成し、施設・設備の面では、最新の学問的知見に基づく乳幼児心理学実験室、設備の整った音楽練習室、その他各種の実習室・実験室などが着々と整備された。また、本学科の特徴として、今日までその足跡は残さ

れ続けていることであるが、開設以来、学科の全学生に課せられた卒業研究がある。これは、短期大学であるための時間的制約や研究体制、施設設備の面などで多少の問題がないわけではなかった。しかし、一つの問題に対して、科学的な姿勢をもって取り組み、協力して積極的に解決にあたり、それらを文章や図表など適切な表現方法を用いて報告する技術を身につけ、ひいては卒業後の日常の幼児教育実践の中で研究する態度を養うことができるなど、特に卒業生の方々からはその価値が再認識されているようである。

学生の飛翔

出帆当初の本学科学生の日常生活の実態に目を向けてみると、歴史を担うパイオニアとして期待されて入学してきた第一期生を初め、各年度の学生に至るまで、学生活動および学問研究活動の両面において、学生生活全般にわたる全学的なリーダーとして、八面六臂の活躍をした。例えば、昭和四十五年から翌年にかけての学友会執行部は、全役員九人中、会長を含めて五人までが本学科の学生であった。

附属幼稚

本学科開設の翌年昭和四十六年四月には、幼児教育研究施設としての「広島文教女子大学附属幼稚園」

園の開設

を開園する運びとなった。これは、保育についての専門の知識と技能とを体得し、現場に役立つ幼児教育者を養成することを目標として、学科設立の時点からすでに計画されていたものであり、第一期生が卒業年度を迎えることになって、他に類を見ない特徴のある実習施設として設置されたものである。

園舎の設置位置や施設設備の配置などについては、特に慎重な検討が重ねられ、多面的な考慮がなされた。その結果、本学科と幼稚園が一体となって学生の教育と保育の研究にあたる研究施設として機能を十全に果たさせるために、上原キャンパス（中島キャンパス設置案に対して）内で、しかも本学科に隣接した現在の位置に設置されることになったのである。

この幼稚園の開園により、本学科の教育内容は一層充実し、同年六月一日からは本園における最初の教育実習が開

始された。

この実習は、この第一期生以来今日まで毎年繰り返されてきており、学科と幼稚園との密接で一貫した指導体制のもとに、学生は日々幼稚園児に接しながら保育のための高度な学問を習得して、実践能力を身につける本学独自の教育を受け、多大な成果を上げている。

発達期および

広島への保育者養成機関よりもやや遅れて幼児教育者の養成を始めた本学ではあったが、本

成長期

学科は、単に時流に乗っての設置ではなく、短期大学発足時以来の願望と、確固たる教育理念に

基づいて開設したものであった。従って、本学科開設にあたった教職員は本学多年の念願であった保育者養成のための意欲に燃えていた。そして、保育者養成の他の一般大学並みの教育内容では満足できなかった。せつかく本学を選んで入学した学生のための本学独自の教育課程と教育環境を整備すべく、積極的に真剣に取り組んできた。教育・研究面はもちろん、生活指導から就職指導に至るまで、多彩な教育計画の具現と進歩発展をはかりながら、今日まで十有余年、幾多の人材を輩出してきた。

定員増

昭和四十五年の開設時には、学則入学定員、募集定員ともに、五十名でスタートしたのであるが、教授陣容と施設・設備が整備された昭和四十七年に至り、社会の要請に応えるために入学定員を増加して、八十名とした。このことにより、教授陣容や施設の充実をはかったのであり、従って授業は四十名のクラス単位にするなど、教育の質の低下を厳に避けて、本学科の発展がはかられた。

幼大連絡

本大学附属の研究施設である広島文教女子大学附属幼稚園と本学科の双方のスタッフが、その連絡を

協議会

密にし、それぞれ両者の機能を十分に發揮させるために作った一つの組織が、幼大連絡協議会である。

この会を通して、双方のスタッフの定期的な協議の場を設け、幼児教育についての実践的研究課題や、学生の実習指

導上の諸々の問題について、研究協議を重ねている。このようにして、幼児教育の現場から遠ざかりがちな大学の教員に、教育保育の現場の問題に接する機会を与えると共に、日常の実践に追われて教育科学的研究から遠ざかりがちな附属幼稚園の教員に教育科学に接する機会を与えることが、本協議会の主なねらいとなっている。本学科の教育研究体制の確立のための基盤ともなっているのである。

幼児教育 卒業生が、それぞれの地域の幼児教育界・保育界において優れた実践を行い、地域社会に貢献できる**講習会** 確固たる立場を築いてくれることは、関係者の誰もが願うことである。しかし、古い歴史に裏打ちされた伝統を持たず、現場に活躍する同窓の先輩を持たない設置間もない大学においては、格別の配慮が必要である。しかも本学科は、地方の大学としては珍しく、学生の出身地が広範囲にわたっているため、卒業後の連絡・指導も容易ではない。その点、関係者の一層の努力が要求されるのである。

このような観点から、本学科においては、在学中における学生の教育や生活指導に対する配慮はもちろん、卒業生に対する現職教育についても、真剣な検討が加えられた。この結果、主として絵画製作と音楽リズムを中心に、保育実践上の諸問題などをテーマとして、毎年夏季に「広島文教女子大学幼児教育講習会」が開催されるようになった。これは、卒業生にとつては、いわゆる研修の場としての目的を達するとともに、同窓生の卒業後の活動の情報交換の場としても大変有意義なものであった。一方、本学科のスタッフにとつても、卒業生が保育現場で遭遇している諸問題に接することにより、大学における教育内容や方法など、幼児教育学科の教育課程を再検討する動機ともなった。この夏季講習会は、数回の実施の後、左記「広島文教女子大学幼児教育研究会」の幅広い活動の一環として吸収され、発展的な意味で、独自の活動としては幕を閉じることになった。

幼児教育

本学科も他と同様、創設にあたっては慎重な検討を重ねて教育研究体制が組織されたのである。実際

研究会

に学生を受け入れてみると、予期しない多くの問題が生じて、その都度、当初の計画を修正しながら、教育研究組織を充実発展させた。学科が生まれて五年を経過する頃になると、諸問題に対処するための組織も一応整備されてきた。そこで、これらを総合的に再検討し、教育研究の組織を中心にした一つの組織として機能的に再構成することになった。これが昭和五十年七月に発足した「広島文教女子大学幼児教育研究会」である。

本会は、本学科の教員、附属幼稚園の教諭、本学科の卒業生、および本学科に在籍する学生をもって組織する研究と情報交換を主とする研究団体であり、究極的には本学科の発展ということがねらいである。この会が目指すものは、会員相互が連絡を密にし、時代の進歩と歩調を合わせて新しい知識や技能を習得し、望ましい幼児教育のあり方について常に検討することにより、会員の資質の向上に努めることである。

今日、実際に機能している本会の主たる活動は、次に掲げるようなものである。

(一) 研究誌「幼児教育の研究」の刊行

本会の名称が示すとおり、研究活動は本会の活動の中心となるものである。本会が毎年発行している研究誌「幼児教育の研究」は、研究論文や幼児教育の今日的問題についての解説、現場での実践の報告、およびそれらに対するコメント、本学科の卒業論文の抄録、会員の活動上有益な情報などを主たる内容とするものである。昭和五十八年現在、すでに第七巻が刊行されており、それらの中には、高く評価されて他の専門誌などに文献として引用されたものも少なくない。

(二) 幼児教育研究発表大会

本研究会が主催し、研究誌「幼児教育の研究」の刊行と並ぶ主要な活動の一面として、「幼児教育研究発表大会」がある。これは、学生の卒業研究の発表の機会となるとともに、卒業生や附属幼稚園教諭の実践的研究、その他、全

会員の研究発表の機会となっている。時には、会員以外の優れた研究者による講演や研修の機会も提供し、多数の一般聴者の参加を得て、熱心な討議が展開されて成果を上げている。

(三) 「幼教通信」の発行

本研究会の活動のもう一方の大きな柱として、会員相互の理解と情報交換があげられる。特に本学科のように、出身地が中国・四国・九州の各県にわたっており、卒業後も広範囲に分散している場合には、会員相互間の連絡を密に保つと共に、絶えず新しい情報を集めておくことは、極めて大切なことである。「幼教通信」は、そのような趣旨のもとに、本会発足時以来、定期的に毎年二回の発行を続けている。これは、特集記事にもよるが、B5版で四〜八頁からなり、タイムリーなトピックや社会的関心事に対する本学科の関係者の解説、コメント、附属幼稚園の様子、卒業生からの情報、在学生の実習体験などがその主な内容となっている。

当初、その機能および効果については多少の懸念はあったが、今日では、当初の期待に違わず、会員相互の共通のプロムナード、あるいはコミュニケーションプラザとなり、まさしく情報交換の場となっており、今後ますますその有効適切な利用が期待されている。

(四) 「卒業生名簿」の作成

特に広範囲にわたる本学科の卒業生との連絡を密にするためには、常に会員の動向を的確に把握しておくことが大切である。しかしながら、会員の活動場所の物理的広大さとともに、結婚などによる移動も極めて頻繁で、年とともにその連絡の抛り所となる糸はますます細るばかりであった。このような折、昭和五十四年五月に第一回目の本学科の「卒業生名簿」が作成された。前記のような事情もあり、それは必ずしも十分といえるものではなかった。しかし、多数の会員から、この作業に対する激励や期待の言葉を得たり、次回の作業に対する協力の申し出を受けることにな

った。そのようにして昭和五十八年春に完成した二回目の名簿は、多大なる協力と努力のお陰をもって、かなり精密なものとなった。これにより、旧友の動向を知り、改めて本学に対する連帯感を強めている会員も多いようである。

(四) その他の活動

本研究会は、前記の活動以外にも、幼児教育学科の総合的な発展を目指して、日々努力を重ねている。T・P・Oを考慮した講演会の開催や、「幼児教育学科発表会」に対する援助なども具体的な活動の一端である。後者は、本学科の学生の日頃の学習研究の成果について、主としてステージを中心に発表する会であり、従来は学科独自に時期を検討して開催していたものであるが、今日では大学祭行事の一環として実施されている。

卒業生の動向

本学科の初期には、卒業生の資質とともに、幼児教育者・保育者に対する社会的需要が高かったという背景もあり、卒業生の進路は、就職先の選択に迷う程のまことに恵まれた状況であった。

以来、高い就職率、しかも専門を生かした道での仕事に就くことができるということは、本学科の一つの大きな特徴となってきた。このような就職の状況は、全国的にも幼児教育・保育の道を志望する者の希望が必ずしも叶えられなくなった近年に至っても、本学科では維持されているのである。これはまさに、本学科の教職員と学生の双方が一体となって絶えず努力を積み重ねてきた結果である。特に学生の側からすれば、将来の自分の道に向って一年生の頃から本気で学習面で努力するとともに、数度に及ぶ地方での実習に取り組み、その真面目な態度が抜群で、すでに実習の時から好感を持たれ、就職に結びつくケースも多いようである。

今日まで保持してきたこのすばらしい成果は、本学科の伝統として、今後も後輩に引き継いで、希望に燃えて入学する学生の夢を実現すべく、鋭意努力を続けて行きたいものと考えられている。

表2 幼児教育学科の歩み

年度	行事・出来事・事項など
45	短期大学部に幼児教育学科を新設、初代学科長として空本和助教授が就任（～五四年三月まで九年间）、第一期生入学式（4/14） 野呂山敬迎ビクニック（4/24） 新学舎へ現学舎へへ移転（5/27）
46	第二期生入学式（4/14） 附属幼稚園開園（4/15） 附属幼稚園における教育実習開始（6/1） 宮島敬迎ビクニック（6/16） 第一回卒業論文発表会及び予餞会（2/15） 第一回卒業式（3/10）
47	第三期生入学式（4/14） 新入生歓迎会（4/19） 第一回新入生歓迎オリエンテーションセミナー（4/26～29） 第二回卒業論文発表会及び予餞会（2/20） 第二回卒業式（3/10）
48	第四期生入学式（4/14） 第二回新入生歓迎オリゼミ（4/30～5/2） 第一回広島文教女子大学幼児教育学科夏季講習会（7/28～7/29） 第三回卒業論文発表会（2/9） 第三回卒業式（3/10）
49	第五期生入学式（4/15） 第三回オリゼミ（6/16～6/18） 第二回夏季講習会（7/28～7/30） 第四回卒業論文発表会（2/10） 第四回卒業式（3/10）
50	第六期生入学式（4/12） 第四回オリゼミ（4/28）
51	第七期生入学式（4/10） 第五回オリゼミ（4/19～4/21） 第二回幼児教育研究発表大会（2/11） 第六回卒業式（3/10）
52	第八期生入学式（4/8） 第六回オリゼミ（4/27～4/29） 一年次生水泳講習会（7/14～7/19） 全日本音楽教育研究会全国大会（10/20～10/21） 第三回幼児教育研究発表大会（2/11） 第七回卒業式（3/10）
53	第九期生入学式（4/8） 第七回オリゼミ（4/24～4/26） 音楽科関係教員発表会へ体育館へ（5/19） 第一回幼児教育学科発表会（10/21） 第四回幼児教育研究発表大会（2/11） 第八回卒業式（3/10）
54	第二代学科長に木下太郎教授就任（～五五年三月まで一年間） 第十期生入学式（4/8） 第八回オリゼミ（4/22～4/24） 就職の手引「学習資料」発行（6/20） 功刀嘉子先生教育講演会（7/6） 実習準備のための特別講義「実習特講一開設（一年次生後期） 第二回幼児教育学科発表会（12/7） 第五回幼

56	第三代学科長に入江隆明教授就任、第一期生入学式 (4/8) 第九回オリゼミ(4/29) 5/1 附 属幼稚園創立十周年記念座談会(10/26) 第三回幼 児教育学科発表会(12/6) 第六回幼児教育研究発 表大会(2/11) 第十回卒業式(3/20) 第十二期生入学式(4/8) 第十回オリゼミ(5/
----	---

57	8/5/10 第四回幼児教育学科発表会(10/24) 第七回幼児教育研究発表大会(2/20) 第十一回卒 業式(3/20) 第十三期生入学式(4/8) 第十一回オリゼミ(5 /11) 5/13 第五回幼児教育学科発表会(10/23) 第八回幼児教育研究発表大会(2/19) 第十二回卒 業式(3/20)
----	---

今後の展望

設置から今日までの本学科の足跡を辿ってみると、曆の推移による時間的経過からすれば、決して長い歴史とはいえないかもしれない。しかし、今日の学科の状況や置かれている立場からすれば、この限られた期間に積み上げられた成果は多大なものがあり、その教育内容・教育実践には、長い歴史と伝統とを備えた他の大学・短期大学・養成施設に伍すとも遅れはないものと自負している。しかしながら、今日の幼児教育者養成の状況は、それに対する社会的需要の変化や新しい養成校の開設など、本学科の開設当時に比べて、相当の変化を遂げてきている。このような変化に対応するためには、本学科においても、これまでの努力の成果に満足することなく、長期的大局的なビジョンの上に立って、新しい時代に即応できるような体制を創っておく必要がある。特に、これまで培われた本学科の歴史の中に芽生えてきている貴重な伝統の上に、他には見られない本学独自の特徴を十分吟味しながら醸成することは、考慮されなければならない条件である。カリキュラム、特に教育内容・方法・各種実習などにおける特徴、あるいは初等教育学科を含めた文学部との関係や短期大学の他の諸学科との関係を十分に生かして、将来を見通した他に比類ない計画が着々と進行している。必ずや将来とも、新時代に適応し、真摯な努力に対する社会的評価を得、優れた人材を輩出する本学科の姿がみられることと確信している。

(文責・堂野佐俊)

服飾学科

服飾学科は、昭和三十七年、本学が可部女子短期大学として発足したとき、最初にただ一つ設置された学科である。当時、被服科としてスタートしたが、昭和四十年代に入り、わが国は高度成長時代を迎え、繊維製品の大量消費、ファッション化の傾向が強くなり、衣生活にも大きな変化がみられるようになった。これらの社会情勢の変化に対応すべく、昭和四十五年、被服科を『服飾学科』と改称し、現在に至っている。

この間、昭和五十三年には、服飾学科に衣料管理士養成課程を設置し、教員組織と教育施設の一層の充実がなされた。

衣料管理士

人類は過去数千年の間、綿・麻・羊毛・絹等の数種の天然繊維を原料とする衣服を用いてきたにすぎなかった。第二次大戦後、科学技術の飛躍的な発展によって、新しい合成繊維の出現と、新たな加工技術が発達し、家庭用繊維製品の消費は、品種、品質、数量共に著しい拡大・発展を遂げ、しかも技術は日進月歩、日々新たな製品が生まれつつある。今後この傾向は増加し、繊維製品の消費生活はますます複雑化し、多様化するものと考えられる。

このような状況下で、今まで経験しなかったいろいろな問題に直面するようになった。そこで、これらの諸問題を科学的に処理し、繊維製品の生産、流通、消費の接点に立って、わが国の産業の健全な発展に役立てる衣料に関する専門家の必要性が叫ばれるようになった。そのような人材の育成のため、現在、全国の五十余の大学・短大で衣料管

被服科発足時

家庭管理学	②
家族関係学	2
家庭経済学	2
住居学	②
育児学	2
服装美学	②
服装史学	②
被服衛生学	②
被服材料学	②
被服構成及び実習	⑫6
被服整理学	②
染色学	②2
デザイン案	②
被服図案	②
手芸	②
栄養学	2
食品学	2
調理学及び実習	4
家庭機械	1
家庭工作	1

服飾学科への学科名
変更時

家庭経営学	②
家族関係学	②
家庭経済学	2
住居学	2
育児学	2
服飾美学	②
色彩意匠学	②
服装史学	②
被服衛生学	②
被服学概論	②
被服材料学	②
被服材料学実験	2
被服構成学Ⅰ	④2
Ⅱ	④2
被服整理学	②
被服整理学実験	2
染色学及び実験	②
服飾デザインⅠ	②1
服飾デザインⅡ	②
手芸	②
染色実習	2
栄養学	2
食品学	2
調理理論及び実習	4
家庭機械	1
家庭工作	1
家庭電気	1

衣料管理士養成開始時

家庭経営学	②
家族関係学	②
家庭経済学	2
住居学	2
育児学	2
服飾美学	②
色彩意匠学	②
服装史学	②
被服衛生学	②
環境衛生学	2
繊維製品消費科学	2
消費者保護論	2
繊維維材料学	②
被服材料学実験Ⅰ	①
被服材料学実験Ⅱ	1
被服構成学	②
被服構成学実習Ⅰ	②
Ⅱ	②
Ⅲ	2
Ⅳ	2
被服構成学特別実習	3
被服整理学	②
被服整理学実験Ⅰ	①
Ⅱ	1
染色加工学	②
染色加工学実験	1
服飾デザインⅠ	③
Ⅱ	①
Ⅲ	1
手芸Ⅰ	2
手芸Ⅱ	2
栄養学	2
食品学	2
調理学	2
調理実習	2
家庭機械	1
家庭電気	1
服飾研究	②

理士の養成が行われており、その一つに本学の服飾学科が入る。

服飾学科 前述の如く、昭和四十五年の被服科から服飾学科への科名の変更、昭和五十三年の衣料管理士の養成の歩み 開始と、この二回の大きな転換を経たことになる。

この間の教育内容にも大きな変化がみられる。被服科発足時（昭和三十七年）、服飾学科への学科名変更時（昭和四十五年）、衣料管理士養成開始時（昭和五十三年）のそれぞれの時期における学科のカリキュラムを、別表に示した。

このカリキュラム表から、被服科発足時（昭和三十七年）は、被服構成および実習に十二単位の必修と六単位の選択を組み、当時の専門教育のポイントを被服構成実習に置き、技術の習得に主眼が置かれ、当時、ハイレベルの技術の習得をさせていたことがわかる。

次に、被服科から服飾学科への学科名変更時（昭和四十五年）に、社会の変化に対応すべく「色彩意匠学」を開講し、服飾関係のカリキュラムを充実し、「被服学概論」「被服材料学実験」「被服整理学実験」等を開講し、被服材料、被服整理に関する実験を通して、被服材料・被服に対する科学的な特性の把握、取扱い等を体験させることとなった。一方、これらの新しく開講された科目と入れ替えに、被服構成学実習の履習単位数は必修四単位、選択二単位の減少となった。このことは、学科の専門教育を被服構成に関する実技に片寄ることなく、被服に関する科学的知識や技術の習得、また服飾デザインに関する幅広い知識・技術の習得を目指したためである。

また、昭和五十三年、衣料管理士養成開始時に、衣料管理士養成に必須として「環境衛生学」、「繊維製品消費科学」、「消費者保護論」、「繊維製品試験法」を新規開講し、同時に「被服学概論」を廃止し、「被服構成学」関係の必修単位を二単位減とした。

「衣料管理士」の免許は、社団法人日本衣料管理協会が資格認定を行っており、いずれの養成大学でも学生定員の八割を限度としているため、本学の服飾学科では学生定員四十名に対し、その八割の三十二名が養成定員である。一方、学生全員が衣料管理士の資格の取得を希望するとは限らない。このような事情から、衣料管理士の資格は取得しないが、被服構成の技術を深く極めるということを目標に、衣料管理士コースと並列に技術コースを置いた。この技術コースを選ぶ学生は「被服構成学特別実習」三単位を履習することになっている。

服飾学科 服飾学科では、前述の如く、実社会で役立つ実力ある衣料管理士を養成することを基本に、また服飾の現況 デザイン、被服構成における高度の技能・技術を習得させ、将来その道で自立を目指す人材の育成を目標に教育を進めている。

現在の服飾学科の専門に関する教育内容は、一年次では、「繊維学」「被服材料学」「被服整理学」「被服構成学」「服飾デザイン」「手芸」など、被服・服飾に関する基礎的な専門科目の講義と、これら専門に関する実験・実習をほとんど必修として学習させている。二年次では、「色彩意匠学」「服飾美学」「服装史」「被服衛生学」「染色加工学」などを必修とし、これらの他に、各人の適性と将来の進路希望によって、衣料管理士の資格取得を目指すコースと、被服構成に関する高度の技術の習得を目指すコースに分かれ、それぞれ次のような科目を履習する。

衣料管理士コースでは、「繊維製品試験法」「繊維製品消費科学」「消費者保護論」などを履習させ、繊維製品に関する試験・検査・消費実態・消費者問題など幅広い知識・技能を習得させている。

技術コースでは、「被服構成学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」計八単位履習の他に「被服構成学特別実習」三単位を履習させている。この「被服構成学特別実習」では、大裁男物ひとえ羽織、コート類、寝具、男袴の製作を行い、平面構成での高度な技術の習得をさせている。

衣料管理士コース、技術コースのいずれでも、課題研究（いわゆる卒論）または卒業製作を必修として、極めて徹底した個人指導を行い、豊かな専門知識と技術を習得させ、実社会で役立ち、また家庭にあっても豊かな衣生活が創造できる女性の育成を目指している。

また、年によって多少は異なるが、約二十名の学生が教職に関する専門科目を履習し、中学校教諭二級普通免許（家庭科）を取得して卒業している。

これら学習の他に、毎年十月に行われる大学祭（文教祭）で、昭和五十五年から毎年服飾学科では展示の他にファッションショーを行っているが、これが大学祭の人気の的である。日頃習得した知識と技術を結集し、学生自らの手で企画・製作・演出を行っている。設定したテーマに沿った素材を選択し、デザインを検討し製作する。作品ができ上がると、音楽やナレーション、照明に合わせてモデルの振り付けを行う。

学生にとって、一年生と二年生がお互いに協力して、自分たちの手で成功させた感激は大きく、以後の勉学や学生生活に一段と意欲をわかせている。また、多数の観客の前でモデルを体験した学生は、「一生の思い出になった。」と感激している。

また二年次には、夏休み直前に京都方面へ研修と親睦を兼ねて一泊二日の研修旅行を行う。例年、友禪染の工場や織物工場、編物工場、織維関係の研究所等を見学し、日頃学んだことを実地に見聞し、その高度な技術に驚きと感動を覚えている。学生たちは一泊二日の見学終了後も、数人の気の合った者同志が小グループで引き続き京都を中心に数日の旅行を続けるものも多い。これらの研修旅行を通じて、学科内の学生間のまとまり、協調性、企画力、創造性の育成に努めている。

卒業後の進路

ほとんど全員が就職を希望し、ここ四～五年、不況下にもかかわらず百パーセントの就職率を誇っている。就職先としては、百貨店、量販店、繊維商社、アパレル商社、衣料品専門店、繊維メーカー、アパレルメーカー、縫製メーカー等の衣料関係企業が主体である。これら衣料関係企業での職種としては、商品企画、商品管理、営業販売、ディスプレイ、コンサルタント、デザイン、裁断、縫製、検査、クレーム処理、社員教育、仕入れなど、多岐にわたっている。

今後の展望

現在の社会情勢は、経済安定成長時代、省資・源省エネルギー時代を迎え、われわれの生活意識も変わりつつある。今後の衣生活を考えると、科学技術はますます発達し、繊維製品の製造技術、加工技術は、日進月歩、ますます複雑化、多様化することが予想される。このような情況下で、個人の衣生活は、使い捨てるの大量消費でなく、数多くある素材の中から適切な素材を選び、その素材の持つ特性を十分に生かして、より機能的に、より個性化、ファッションブルなものを創造・製作し、物質的な豊かさでなく、精神的な豊かさを求めるのではなからうか。このような社会情勢、個人の意識の動向を踏まえ、これら時代の要請にマッチした教育、研究活動が必要であり、常にその努力を進めていきたい。

服飾学科では、今春（昭和五十八年）第二十回卒業生を送り出し、今日まで合計七三五名の卒業生を出している。現在、二年生五十名、新入生五十八名を受け入れ、新年度を迎えた。

服飾研究会

また服飾学科では、第二十回の卒業生を送り出した記念すべき今春、広島文教女子大学服飾研究会を発足させた。服飾研究会は、教職員、在学生、卒業生をもって組織し、服飾に関する研究活動、情報交換等を通じて服飾学の向上発展を図り、あわせて会員相互の親睦を深めることを目的としている。その活動は、機関誌の発行、研究発表会、会員相互の親睦行事等を予定している。

この服飾研究会の活動を通して、在学生の大学内の教育に加えて、実社会で活躍中の卒業生の力添えを得る。また卒業生にとっては、卒業後は新しい知識を得たり研究をする機会はまだことに少ない実情にあるが、その時代の学問・技術の進歩に遅れることのないよう、学問・研究の場としていきたい。

*

今後、服飾学科の教育研究活動を、教職員、在学生、卒業生が一体となって遂行し、服飾学科の充実発展を期したい。

(文責・林 郁弥)

食物栄養学科

創設のとき

食物栄養学科の設立は、昭和三十九年であり、食物専攻と栄養専攻の二専攻を併設した。初代の学科長は竹吉正規教授（故人）であり、栄養指導担当の出崎一枝講師（後教授）と豊後孝江助手（現教授）の協力が得られて、栄養士養成には顕著なる成果を挙げてきた。近年に至るまで、本学の目玉商品とでもいふべき存在となっており、本学で最大の難関学科であった。ところが、近年時代の流れとともにその隆昌にも問題点が指摘されるに至っていた。

私が本学に奉職することになり、大阪から赴任して来たのは、そうした昭和五十年四月であった。

食物専攻と

当時、食物栄養学科は、食物専攻と食物栄養専攻の二つのコースに分かれて授業が行われてい

食物栄養専攻

た。食物専攻は、中学校教諭二級の家庭並びに保健の免許取得を目標とし、食物栄養専攻は栄養

士の免許取得を第一目標とし、併せて中学校教諭家庭二級の免許取得を目指していた。栄養士養成の課程は、従前の努力の成果が顕著で、世間の評価は定着している観があり、応募者も増加していたのであるが、どうしたものか、当時食物専攻の志願者が逐年減少を続けるという現象が起こっていた。そこで、早速これの原因を解明したいものと、種々の調査をし検討を重ねた。この結果わかったことは、まず、食物専攻においては取得できる資格が中学校教諭二級免許だけであり、この資格では、中学校教諭の一級免許取得者の充足の煽りをうけて、ほとんど就職にはつながらないという実情であった。これに反し、食物栄養専攻においては、栄養士の資格取得により、当時まだ社会的に未充足の部面が多い栄養士の職場へどんどん進出しているという状況であった。本来、短期大学の食物栄養学科のように、あくまで職業教育を目的とする学科においては、これが就職につながるには致命的な問題で、この就職の見通しの明暗が、前述の専攻別志願者の大きな数の片寄りとして現われたものと、結論せざるを得なかった。そこで、この問題を打開するため、食物専攻の授業内容を改善するための検討を進めた。

食品加工业 当時は、食品加工业が新興産業としてめざましい発展を見つあった時代で、当然、食品科学の初級の**発展** 級技術者を業界が多数要求していた。私自身も、このような社会的要求に依って、食品科学の初級技術者としての女子技術者を養成することに大きな夢をもって着任したところでもあり、このような事情が夢を一層大きく膨らませたことも否めない事実であった。

次に、前述の食品加工业界は、当時スーパーマーケットの発展と共に、コールドチェーンが発達し、冷食産業の勃興期でもあった。また食品の輸送も道路の発達と冷凍輸送の進展で適地適産の傾向が進み、同一地点での食品の大量加工が可能となった時代で、食品加工业から見れば、維新的時代でもあった。すなわち、このような背景のもとに、食品加工业は隆々とした発展段階にあったのである。一方、消費の面からこれを見れば、食品の加工度が進めば進む

程、その食品の家庭における調理の手間が省け、あたかも夫婦共働きの社会的風潮に応える結果となり、大きく歓迎されることとなった。しかし見方を変えれば、工場で加工された食品が直接消費者の口へ運ばれることになり、その食品の安全性が大きく問題として浮上してきたのである。これに対し、厚生省としては、必然的に加工食品に対する安全検査の強化を指示することになり、食品加工場における食品検査要員の急増が予見されるに至った。当時、東京・大阪方面では、特にこの傾向が著しい様子で、栄養士の資格を有しながら、このような食品工場の試験・検査要員として就職するものが、本来の栄養士としての職に就くものより多いという異常な現象を呈するに至っていた。

食品科学教育

在来医療関係に、臨床検査技師という制度がある。これは、血液や尿の検査結果が医師の診断の協議会の設立 場において重要な判断材料とされるようになったので、この検査員の技能を一定水準まで向上

し、その検査結果の信頼度を高めるためのものであった。食品加工業界においても、その加工品に対する安全検査結果は日増しにその重要度を増してきている。すなわち、その検査を担当する要員は、当然一定水準以上の技能者であるべきで、たとえば、食品管理士のような新しい資格が公定せられるべきである。

しかし、新しい資格が国で公定されるように国へ働きかけるためには、単に一大学のみで動いてもどうにもならぬ問題である。そこで、同じような考えの大学はないものかと学会その他の機会を利用して広く意見の打診を行った。その結果、関西の帝塚山短期大学において、この食品管理技能要員の養成を目的として食物栄養学科の他に食品科学科の新設を計画中とのことを知った。早速、同学の高田教授にお会いしたところ、全く当方と同じ考え方であることを知り、大いに意を強くした。以来、高田教授とたびたび会談を重ね、資格の問題についても、同時に検討を重ねた。幸い高田教授は上京される機会も多く、その筋に対する折衝を続けていた。その結果、いきなり全国的に新しい食品管理士のような資格を国が新設することは当面困難であり、相当の期間が要ることが判った。

しかしながら、社会的情勢を考えれば、関西方面だけでも同じ考えを持った大学が集まって、早急にスタートしようということになった。早速、学長のご同意を得た上で、本学と帝塚山短期大学が中心となり、二十数校の賛同の下に、「食品科学教育協議会」の設立にこぎつけたのである。この協議会は、昭和五十五年に発足した。資格については、当非同協議会の決定した認定科目修得者に対し、更に同協議会の特別研修を行い、総合審査を行って、食品科学技術認定証書を附与することにした。このような次第で、本学においても、食物専攻の教科内容をこの目的に合致する如く一部変更することにつき、学長のお許しが得られたので、ここに在来の食物専攻を食品管理コースとし、同時に食物栄養専攻を栄養士コースとして、昭和五十六年度より学生募集を行った。期せずして、前期帝塚山短期大学においても同年より食品科学科が発足したのである。

施設整備

さて、この新しい食品管理コースは、あくまで食品加工業界の新しい要望に寄与できるような、食品管理技術者の養成をめざしたものである。すなわち、食品加工業における工場の衛生管理技能を身につけさせると共に、食品の分析、微生物検査および工場の給排水の管理関係に至るまで、可及的にその検査技術を修得させるべく授業課目の編成を行った。このような新しい内容を持ったコースをスタートさせるためには、どうしても食物専攻当時の設備では不足で、学長にお願いして施設の増強をしていただいた。すなわち、在来の理化学実験室の他に、新しく微生物実験室および計測実験室を増設していただいたのである。幸いその年、文学部に初等教育学科の新設があり、それに伴って短期大学部に教室の増設があったために、食物栄養学科の二教室および幼児教育学科の図画工作室の転用が可能となり、それらを改造して、前記二つの実験室を新設していただくことができた次第である。

この食品管理コースは、昭和五十六年度に、前記帝塚山短期大学の食品科学科と同様、第一回生の募集を行い、引

き続き今日に至っている。募集にあたっては、いろいろ手を尽くして広報宣伝に努めたが、どうしても周知徹底を欠き、十分その目的を達することができなかった。しかし三年目に至り、ようやく志願者の定着を見ることができるようになった。すなわち、当初二十名の定員で出発したものが、三年目から三十名に増加した。そして五年目の今年、八十一名の受験生を数え、来年度より定員を四十名に増加せんとする希望が持てる段階に至っている。この食品管理コースの学生の就職については、当初考えていたとおり、食品加工方面の需要が多く、おおむね予期したとおりの成果を収めている。

就職状況

さて、本学の食物栄養学科の基盤は、あくまで創立以来長らく培われてきた食物栄養専攻、すなわち栄養士コースであることはいうまでもない。このコースは、今年で十八回の卒業生を送り出すことになる。これを合計すると、約八百五十名の栄養士を世に出したことになる。これら本学の養成している栄養士は、前述の東京、大阪の例とは大きく異なり、例年その約七十パーセントが栄養士としての職場に就き、多大の成果を収めている事は周知のことで、本学栄養士がその技能を高く評価されているゆえンである。もちろん、学長の日頃強調されている事は本学独自の人づくりの教育の成果が、これに大きく寄与していることはもちろんである。これら卒業生の中には、栄養士コースにおいては、一歩進んで管理栄養士の国家試験に合格した者が二十名以上を数え、また、生活改善普及員として活躍している者も百名に達せんとする状態である。

一方、食品管理コースにおいては、生活改良普及員その他、水質汚濁防止管理者の資格取得者も出ており、それらの者の活躍が今後期待される次第である。

将来展望

かくして、食物栄養学科としては、食品管理コースと栄養士コースの二つのコースの充実により、食物栄養関係の初級技術者を送り出し、いろいろな方面の要望に応えられるようになったが、なお一層

の進展を期している。先にも述べたように、世の中の食品業界の最近の進歩は、誠に目覚ましいものがあり、その技術はまさに日進月歩の様相を示している。本学においても、この進展に歩調を合わせ、ある部面では、一步前進してその指導的立場を保持すべく、職員を挙げて鋭意努力を続けている。かくして、本学の食物栄養学科は、激しい食物業界の進展に対応できる態勢が、一応整ったものと自負している次第である。

(文責・三輪萬治)